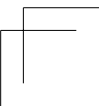
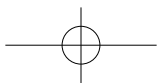
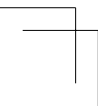
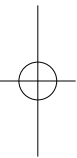
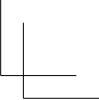
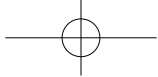
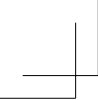


二〇二三年度

中世文学会秋季大会

講演・研究発表要旨



「中世王朝物語」は文学史用語たり得るか

二松学舎大学特別招聘教授 妹尾 好信

「中世王朝物語全集」（笠間書院刊）全二十二巻がまもなく完結を迎える。一九九五年（平成七年）の刊行開始以来三十年近い年月を要した大事業であった。中世に作られた擬古物語の現存作品すべてについて、読みやすい校訂本文を提示し、現代語訳を付すという画期的な試みで、これによって、従来あまり読まれていなかった擬古物語は、研究者のみならず一般読書人にもずいぶん身近な存在になった。

私はこのシリーズで第二巻『海人の刈藻』を担当したのだが、はからずもそれが第一回配本となって、宣伝用パンフレットの組み見本に使われたりして気恥ずかしい思いをした。

それはともかく、「中世王朝物語」という語はこのシリーズのために作り出されたものであり、発案者は編集委員の一人であつた稲賀敬二広島大学教授（当時）であることが知られている。すなわち私の師匠による造語なのである。

それまで「擬古物語」のほか「鎌倉時代物語」などとも呼ばれて呼称が一定しなかった中世の王朝風物語群に新たな用語が与えられたことは、研究の活性化にも寄与したように思われる。

ただ、用語の普及が進む一方で、「中世王朝物語」という語が学術的な文学史用語として適切かどうかについて一部研究者から疑問が呈された。もともと学術用語として十分吟味された上で使用されるようになったわけではなく、出版企画のタイトルとして販売戦略上の目的で編み出された用語であるから、それが本当に学術用語にふさわしいかどうかは当然検討されなくてはならないだろう。私は立場上、師匠の造語を支持し、普及に力を尽くしたいのだが、そのためにも批判には謙虚に耳を傾ける必要がある。

「中世王朝物語」は文学史用語として適切か否か。中古文学の研究者の間だけで議論されている感のあるこの問題について改めて考え、中世文学研究の専門家の皆様のご意見を仰げばと思う。

新古今時代に關してやり残したこと三題

東京外国語大学名誉教授 村尾 誠一

三年前に定年を迎えたが、その後することとして、新古今時代に關しては、三つの課題を考えていた。他のことを先にして、ほぼ白紙のまま経過してしまった。この度、講演の場を恵まれたのを機に、遅まきながら着手し、その報告をさせていたたく。

一題目は、「『新古今和歌集』企画の始発―源通親の関与の問題―」である。拙論「後鳥羽院正治初度百首と勅撰和歌集への意思―『正治和字奏状』の再検討を發端に―」（『中世和歌史論 新古今和歌集以後』青簡舎・二〇〇九年）で提示した問題の展開である。後鳥羽院歌壇の始発となった「正治初度百首」に息定家の参加を直訴する『正治和字奏状』を、俊成には勅撰和歌集への期待があったのではないかと読んだ。さらに、それは定家等にも共有され、百首応制の段階で、後鳥羽院にもその意思があり、その意思形成に百首の推進者源通親の「発企」のようなものが考えられないかとするものであった。今回はその論を振り返り、通親の作品、また、新たに出来した『三百六十番歌合』を後鳥羽院撰とする論をめぐる問題などを考えてみたい。

二題目は、「後鳥羽院御口伝の執筆時期―やはり隠岐執筆ではないか―」である。拙論「後鳥羽院御口伝の執筆時期再考」（前掲書）で考えた隠岐執筆説への回帰とその後である。拙論の検証からはじめ、そこで宛先として想定した藤原基家の可能性について、基家と定家・後鳥羽院との関係の中で何か見えてこないかを考えてみたい。新たな問題として寺島恒世氏により提起された、「有心」を重視する『毎月抄』を『御口伝』の定家評を克服するために、定家を継ぐ者が書いた歌論だとする見解についても考えてみたい。

三題目は、「藤原定家の文学をどう読むか―近代詩歌の「古典」との関連で―」である。これについては、子規の「写生」、白秋の「新幽玄体」などとの関連を論じ、さらに思考を重ねている。今回は内実には触れないが、近い将来に書籍の形でその成果を示したい。

研究発表要旨

平安末期和歌の音声描写の一特色―寂蓮をその典型とみなして

お茶の水女子大学大学院生 木村 香子

千載集には、生物・無生物が発する鳴き声や音（以下、音声）の移動や様態を描写した歌が一定数入集する。当該表現は、詞花集以前の勅撰集には見られないものである。

たとえば、寂蓮には前時代と比較して特異な音声表現が見られる。千載集に入集した寂蓮三三五歌「尾上より門田に通ふ秋風に稲葉を渡るさを鹿の声」は、後に「面白き歌」として俊成・定家父子に批判されたことで知られる歌であるが、音声の移動していく過程が示された歌である。寂蓮には、このような表現による作例が他にも複数見受けられる。また、他の歌人でも、千載集三一五の道因歌などは、寂蓮三三五歌と趣向を同じくしており、同時代において当該表現が複数の歌人によって試みられたことが確認される。

そこで、本発表では、寂蓮の用例の検討を中心に据えつつ、平安末期に隆盛したと思われる音声表現の展開を明らかにすることを目的とする。結果として、当該表現は、寂蓮固有の表現ではなく、周囲の歌人（特に慈円、良経、家隆、雅経）にも共有された手法であったことが確認される。

続いて、新古今集、新勅撰集の入集状況や歌合判詞などから、当該表現が作例数に反して勅撰集への入集が少ないことに着目して、当該表現における定家の忌避感を指摘する。また、先述した京極中納言相語の記述において、「面白き歌」として挙げられる歌は、四首中三首が音声の描写に関わるものであり、先述の平安末期的な方法によって詠まれたものである。このことから、定家は、当該表現による歌を「面白き歌」として否定していたことが窺える。寂蓮と定家の対立として論じられることの多い相語の記述は、このような平安末期的な手法の忌避という文脈としても読むことが可能ではないか。平安末期に発生し、隆盛した音声表現は、千載集において一定の評価を得ていたが、定家以後に衰退していくという変遷をたどると結論づけられる。

鷹司冬平と京極派―伏見院による信任とその後の関係をめぐって―

志學館大学 鏑 武彦

鷹司冬平は、関白基忠の男で、鷹司家当主として鎌倉時代後期に政務を司った権門歌人である。旧稿「摂関家和漢兼作者による和歌の詠作―近衛基平と鷹司基忠―」（『国文学研究』第百九十三集、二〇二二年三月）において、基忠が伏見院から厚い信任を得ていた形跡が見られる旨を述べたが、その嫡子たる冬平に対しても、伏見院は父同様に信頼を寄せていた。『井蛙抄』には、「伏見院、後伏見院に申置る、条、内、『向後勅撰あらば、永福門院と鷹司前関白とに可被申合』云々。此条、後照念院殿たしかに御物語ありし事也」と、平惟輔の言葉が引かれている。伏見院より十歳年少の冬平は、伏見院の晩年に関白として揺るぎない地位にあったと共に、その和歌の力量も広く認められるところであった。『嘉元百首』等の応製百首の作者であるほか、『新後撰集』以下の勅撰和歌集にも八一首が入集していることから、それは明らかである。しかし、歌人としての冬平については、その詠作が明らかな京極派歌風とは言えないこともあり、ほとんど研究もなされていないのが現状である。また、伏見院から和歌への熱意を託されつつ、後伏見院は勅撰和歌集撰進の院宣を下さなかった。冬平も伏見院の信任を得ながら、結局京極派に対して持てる力を資することがなかったように見える。この点も、歌人としての冬平が後代に顧みられなくなっている一因であろう。

本発表では、まずは冬平の父である基忠の和歌実績を読み直し、その歌風や伏見院との関係を改めて確認する。それを踏まえて、冬平の和歌実績を辿りつつ、冬平がどのような詠作活動を行っていたのか、また、当時の歌壇において冬平がいかなる存在の歌人であったのかを考える。さらには、伏見院の皇子である花園天皇による『花園天皇宸記』を始めとする日記・記録類から、冬平の人間像も探っていく。歌人としての鷹司冬平を、京極派との関係を軸に据えて再評価してみたい。

「京極派」再考―その終焉と継承について―

青山学院大学 山本 啓介

京極為兼が主導した「京極派」歌風は、為兼の配流と没後にも持明院統（南北朝期の北朝）周辺に継承され、『風雅集』を成立させるものの、観応の擾乱の際に光厳院・崇光院らが南朝に拉致され、後を継いだ後光厳天皇が二条派和歌に転じたことを以て終焉した。以上が現在の通説と言えるだろう。しかし、八瀨正治「後崇光院詠草を巡って」（『書陵部紀要』三一、一九七九年）は崇光院流を継いだ栄仁親王を「風雅歌風の最末に属する人物」とし、その晩年には二条風に変化し、その子の後崇光院も「完全な二条風な詠風」となったとしている。また、伊藤敬『室町時代和歌史論』（新典社、二〇〇五年）は、『菊葉集』所収の崇光院と栄仁親王らの詠に「京極派の残照」が見出せるが、応永八年七月の伏見殿の火災によって「かろうじて伏見殿に伝えられてきた京極派和歌」が「物理的・精神的な終熄」を迎えたとしている。

以上のように、「京極派」がいつまで存続し、そして終焉したのかについては揺れがある。さらに、時代の下つた室町期以降の宮廷和歌を見渡すと、時として「京極派」風を思わせる繊細な陰影描写や特殊表現の作が詠まれていることがある。これらの作品は単なる偶然の類似的産物なのだろうか。

そもそも先学諸氏の見解の相違は、「京極派」についての認識の揺れや定義の曖昧さに起因するところが少なくない。本発表では、『風雅集』仮名序や周辺の歌論の再検討から、「京極派」という呼称がどこまでを指すべきか、その歌風の特質と併せて再検討を行う。そして、特殊な表現や字余り句を一つの指標として、代々の伏見院流とその周辺の作を分析する。以上の検証を通じて、後光厳天皇が二条派歌風に転じた後にも、伏見院流の歌風が崇光院とその子孫達に変容しつつも継承され、やがて室町戦国期さらには近世の宮廷歌壇に流れ込んでいた可能性について論じる。

諏訪社の田村麻呂伝説―高丸討伐譚の展開―

日本学術振興会特別研究員PD 間枝 遼太郎

信濃国一宮諏訪社の中世の縁起の中には、「高丸」と呼ばれる奥州の鬼を坂上田村麻呂と諏訪明神が討伐したという話が見られる。この諏訪社の高丸討伐譚は後に『鈴鹿の物語』などにも形を変えて取り入れられたことが知られるが、一方で諏訪社がそうした田村麻呂伝説を自らの縁起として説くようになるのは、比較的新しい時期、鎌倉末期以降のことだったとこれまで見なされてきた。例えば福田晃氏（『神道集』『秋山祭事』『五月会事』の生成―『諏訪信重解状』『諏訪物忌令』とかかわって―）『安居院作『神道集』の成立』三弥井書店、二〇一七年）は、『神道集』『秋山祭事』『諏訪信重解状』『清水寺縁起の内容比較から、清水寺縁起（清水観音・毘沙門天・地藏菩薩の靈驗を説く）を原拠として『神道集』『秋山祭事』の原縁起（清水観音・毘沙門天・諏訪明神の靈驗を説く）が生成され、さらにそれを諏訪明神単独の靈驗譚として変容させることで『諏訪信重解状』のような諏訪信仰本位の高丸討伐譚が成立したとする。

しかし、果たして諏訪の高丸討伐譚の成立をそのように想定するのは妥当だろうか。『諏訪信重解状』に近い諏訪明神単独の高丸討伐譚を記すものに『諏方大明神画詞』があるが、その編者である諏訪円忠は、縁起作成のための資料収集の過程における洞院公賢とのやりとりの中で、諏訪明神が「田村磨將軍」とともに「安倍高丸」を「誅罰」したという話が『隆弁僧正式』なる文献にあると述べていた（『園太暦』延文元年八月三日条）。『隆弁僧正式』は鶴岡八幡宮別当の隆弁（一二〇八―一二八三）の手になると見られる佚書であり、ここに諏訪明神単独の高丸討伐譚が、福田氏の想定する原「秋山祭事」よりさらに前に存在した可能性が示唆される。本発表では、そうした疑問を出発点として、田村麻呂伝説・高丸討伐譚の展開の流れとその中における諏訪明神縁起の位置付けを再検討することを試みる。

近代国定国語読本における源義経伝承の受容

大阪府立吹田高等学校 小森 一輝

『平家物語』『義経記』などにおける源義経は、昭和戦前期の小学校国語読本の中で、最も登場回数が多い人物であった。このような近代教科書における義経伝承の受容を解明することは、『平家物語』『義経記』などの受容史の一端を解明することにつながる。

中村格、大津雄一、ハルオ・シラネ、渡瀬淳子らの研究によって、『太平記』『平家物語』『曾我物語』などの軍記物語は、その原像をゆがめられ、忠君愛国などの国民精神を涵養するための教材として近代教科書に採択されていたことがわかっている。しかし、近代教育における義経伝承について、教科書やその編纂趣意書などを詳細に調査した研究は十分になされていない。そこで本発表では、明治時代から昭和戦前期までの国定国語読本、教科書編纂趣意書、教師用参考書の調査を行い、義経伝承がどのような教育目標のもとで採択されていたのかを報告する。

調査の結果、一九一〇年ごろから五条橋の決闘や鴨越の奇襲、弓流しなどの章段が教科書に採択され、それは終戦まで継続したこと、それらは義経の国民的人気を利用し、尚武（軍人）の精神を涵養するための教材であったことが判明した。さらに、太平洋戦争の最中では、鴨越の奇襲を真珠湾攻撃に比することが社会通念となっていたことがうかがえた。このような社会通念は、義務教育で採用されていた国定国語読本を通して培われたと考えられる。さらに、『義経伝説と文学』の著者である島津久基さえ、義経伝承を利用した戦争賛美をしていたことがわかった。現代的視点で見れば、義経伝承を体制側へ加担するように利用することは、「判官贔屓」なる語に象徴される、体制からの逸脱者・不遇者への同情心とは相反するものである。

このような教材の利用により、戦後、尚武（軍人）の精神の涵養という意義を失った義経伝承は、全文が墨塗りで削除され、それ以降も教材としての採択がほとんどなくなったことを併せて報告する。

覚一本の「練成」とは何か——『平家物語』巻十一「那須与一」の流動と展開——

國學院大學 野中 哲照

『平家物語』はなぜおもしろいのか——そのような問題の立てかたをみると、そもそも研究にはなりえない。
「おもしろさ」は読者それぞれの主観によるものだからである。

これまでに発表者は、「緊張と弛緩」（落としておいて上げるV字型）、「興奮と鎮静」（上げておいて落とす逆V字型）——総合すると「刺激と安定」——の概念を用いて歴史叙述の文学史的展開や物語の構造を説明してきた。これは、ラストを「めでたし、めでたし」で閉じる昔話や、最後には王子様と結婚する『シンデレラ』などにも共通する物語の基本構造である。人種・民族を超えた人類共通の認知に支えられた普遍的構造であり、誰も否定することができない（つまり「主観」「印象批評」とはいえない）。そのメタ認知的な構造の下部にそれぞれの文脈や語彙が紐づけられていると考えれば、「主観」「印象批評」から脱却した物語の〈読み〉を提示することは可能なのである。

拙著『那須与一の謎を解く』（二〇二二、武蔵野書院）の「コラム11 『平家物語』研究の現在」で、「『平家物語』の諸本論に定説などない、白紙に戻して考え直さなければならない」と述べた。読み本系・語り本系に分けることなく、また語り本系を一方系と八坂系に分けることもしないで、流動・展開の様相を一本の線で説明することはできないか（部分的には合流・分岐の見極めも必要だが）。V字型構想の考えかたを用いて「那須与一」の表現構造の展開史を提示するのが、本発表である。また同コラムで、覚一本を「最終後出版」であるとも述べた。それは同時に、「流布本は最終後出版ではない」と述べたに等しい。なぜそのようなことが言えるのかについても、私見を示したい。

わたくしたちが対峙すべきは、文学部不要論であり、古典教育軽量化論であり、学習指導要領の改悪という社会的風潮である。理論的な〈読み〉の構築は、『平家物語』の問題にとどまるものではないはずだ。